

杉本県議の 視察報告

日本の海を
豊かにする
サンゴの保全

パンヤンツリー・モルディブ海洋研究所 視察

1998年に世界的に広がったサンゴの白化現象（サンゴと共生している褐虫藻が水温の上昇やストレスで逃げ出してしまい、サンゴ自体もやがて死んでしまう現象）がモルディブでも始まり、将来、島も存続さえ危うくなる状況が考えられるとし、サンゴの保全の取組みが始まりました。バビンファル島に「パンヤンツリー・モルディブ海洋研究所」を設立し、海洋環境の保護と研究が始まりました。結果、2008年3月24日サンゴの産卵が確認され、その後、バビンファル島とイフル島2つのリゾートのリーフの周辺で、9種類、30ヵ所以上のサンゴ礁でサンゴの産卵が繰り返されました。これにより、リーフが白化現象から復活し、リーフに新たに生まれたサンゴたちが定着し、今後は、美しいサンゴの森が作られていくことになるでしょう。

サンゴは、ただ美しいばかりでなく、二酸化炭素を吸収して、酸素を排出します。また、大気中の二酸化炭素を凝縮させ、固体に変える働きも行い炭素を半永久的に閉じ込めてしまうそうです。酸素の排出量は木の6～16倍というから驚きです。

サンゴはやがて白砂となり、海辺の動植物の暮らしを支えます。まさに、海の恵みのリサイクルです。また、この海流はパラオ、フィリピン、パプアニューギニアの別名「コーラルトライアングル」を経て、日本に向かって流れています。サンゴを育てることは、日本の海を豊かにすることにつながるのです。潮の流れの上流で海洋の保全に取り組んでいるので、下流の日本における海洋、海岸の保全に対する取組みの重要性を痛感しました。



日本のODAで建設された防波堤により被害を出さずに済んだ事を記念して建てられた津波モニュメント



在スリランカ日本大使・粗 信仁氏(左側の方)と、援助について意見交換



子供たちの歓迎を受ける



アール国会議員と意見交換

とおるニュース

TOORU NEWS

15記事からの一部抜粋です。

この視察報告は、県自民党・国際協力議員連盟の行政視察です。
(4/21～4/28 スリランカ、モルディブ 13名参加)

子供たちに教育環境の支援 スリランカ全国幼児教育振興財団 視察

当財団は、学校運営を通して経済的に恵まれない子供たちに就学の機会を提供しています。財団理事長である僧侶のソーマワンサ博士のスリランカの哲学や文化に基づいた教育システムにのっとった教えは高い評価を得ています。今回の視察は、子供たちを始め保護者の方々からも大歓迎を受け、経済的には恵まなくても目の輝きに感動を覚えました。また、横浜北ロータリークラブから学校在籍の下半身マヒの女子へ電動車椅子を寄贈する役目も負っていました。本人はもとより多くの人々から大変感謝されたことは、私たちも感激しました。

公的に教育が行き渡っている日本と比べ、誰かが手を差し伸べなければならぬ教育環境が存在している現実を目の当たりにして、私たちアジアの一員として民間レベルでも援助しなければならないと痛感しました。また、子供たちは、日本の子供たちと交流したいと願っていることを今後の課題として対応していきたいと考えています。

公的に教育が行き渡っている日本と比べ、誰かが手を差し伸べなければならぬ教育環境が存在している現実を目の当たりにして、私たちアジアの一員として民間レベルでも援助しなければならないと痛感しました。また、子供たちは、日本の子供たちと交流したいと願っていることを今後の課題として対応していきたいと考えています。